

アルザス便り

荒 井 由 美

アルザスのヴォージュ山脈のふもとに赴任してまる二年になろうしています。フランスにある日本人学校といっても、基本は寮生活を維持して授業を行う小規模校ですので、山村の寮つきの学校とお考えいただければいいのではないのでしょうか。不慣れな宿直や四種類の科目を次々にこなしていかなければならないことが新米の悩みとなりました。一年目は、25年間蓄積したと思っていた知識があいまいで哀れなほど少ないということをも痛切に思い知らされました。また知識を伝えて消化していくばかりで、じっくり下調べができないつらさも、ほんとうに大きな悩みでした。二年目ともなればそれでも緊張感がうすれ始め、手をぬくことも覚え、まわりをうかがう余裕が出てきたように思います。

アルザスはルイ14世がフランスに併合して以来、ドイツとの間で取り合いの続いた土地です。ライン河の豊かな氾濫原であるうえに近代には火薬の原料となるカリ硝石が南方のミュールーズで大量に採掘できたからです。学校の裏の丘を上がると、ライン対岸のシュヴァルツヴァルトまで見渡せるのですが、そこは第2次大戦中の激戦地であり、何千という十字架、ユダヤ教徒の墓、アルジェリア兵の墓が墓々と並び屍を思わせるようです。また村や町のはずれに解放軍であったアメリカ軍の戦車が手入れされて置かれている、そんな光景によく出会います。そういうところには必ず、「――は1944年フランスのために死んだ」と書かれています。

「もう明日からフランス語は使えないのか」と嘆息をもらす少年の物語、ドーデの「最後の授業」は日本でも教科書に載っているためか夙に有名です。アルザス語はドイツ語の方言だから生活語を奪われたのではないとする主張があったように思いますが、実際にはアル

ザス語の使用も禁じられたようです。アルザシアンの名はすでにポール、ジャンなどフランス語化していますが、これも強制的にドイツ語読みに変えさせられたそうです。民族衣装を縫うことも禁じられ、地下室でフランス国旗とともに縫い続けた人の話なども耳にします。

ではあなたがたは何人ですか、と聞くと必ず、アルザス人だという答えが返ってきます。そして二番目にはフランス人だと添えるのです。中世までの伝統はドイツ風の、近代以降はフランスの文化を愛してきたアルザス人はやはりどちらの国にもすっぽりはまることのできない一つの民族の単位のようなのです。

7月14日にもなれば小さなアルザシアンから戦車までのパレードが三色旗を翻すのですが、普段、三色旗と村の旗の横にもう一枚別の旗を見かけます。明るい群青に12の金の星が輪に並ぶデザインです。これが県庁に、ヨーロッパパークという欧州版ディズニーランドに、果てはディスコに飲み屋に掲げられています。これはこのあたり一帯でしか見られません。この旗はヨーロッパ共同体の旗なのです。

友好協定以来25年間フランスとドイツの歴史的な和解で何より繁栄と平和を取り戻したのはアルザス・ロレーヌではないのでしょうか。この友好を保っているのはいうまでもなくヨーロッパ共同体です。経済統合をめざして、1992年には共同体のパスポートを統一するようです。アルザスはこのヨーロッパ共同体の中で、フランスとドイツの勢力争いから自由になり、共同体の中の一つの単位として存在することを望んでいるように思えます。

(32回生)